



レースに金箔を貼る独自の技術を開発し、特許を取得。一つ一つのレースに数枚を貼り重ね、余分な金箔を丁寧に払い落とす



糸と金箔の組み合わせが、ゴージャスな中にも繊細な雰囲気を作り出す



絹糸と金箔で最先端の「伝統工芸」

ナニコレ!?
スゴ技アート

金沢市の金箔ジュエリー作家・デザイナーの木和田里美さんが手掛けるアクセサリは、手に取るとその想像以上の軽さに驚きます。「こんなに軽いのはなぜ?」。秘密は「絹糸+金箔」という素材にありました。日本とヨーロッパの伝統工芸を組み合わせるアクセサリはどのように誕生したのでしょうか。その技術に迫ります。



小ぶりのピアスはつけていることを忘れてしまうほど軽く、デザインも豊富

「伝統工芸を日常に身につける」がテーマの新しいアクセサリは、絹糸と金箔で作ります。絹糸のレースは、糸の結び目の並べ方でさまざまな模様を生み出す「タティングレース」というヨーロッパ発祥の技法を駆使しています。長年編み物を続けてきた木和田さんがタティングレースに出合ったのは2008年の会社設立から2年後のこと。「繊細な模様が編めるので、これなら金属アレルギー



形のバリエーションに加え、天然石を組み合わせるなど、多様なデザインを展開

の私でも安心してつけられるアクセサリが作れるのと思い、早速試しました。でも、形が崩れやすい。張りを保ちながらアレルギーを起こさない素材は何かと考え、たどり着いたのが金箔でした。繊維に編まれたレースと金箔をどのように加工すればよいか試行錯誤を重ね、完成にこぎ着けたといいます。



金箔ジュエリー作家・デザイナー
木和田里美さん (58) = 金沢市 =

◎1964年氷見市生まれ。石川県内の洋食器メーカー商品開発室勤務を経て、2008年に株式会社エイチツーオー設立。金箔ジュエリーのブランド「ゴールド・ノット」を立ち上げる。2014年、石川県デザイン展 工芸デザイン部門入賞。19年には、ニューヨーク「アート&デザイン美術館 Museum of Arts and Design」をはじめ欧米で展示販売を展開している。金沢市南町に店舗兼工房「Gold-Knot」を構える。



大ぶりで、ドレスアップにぴったりなピアス



レースを立体的なかご状に編み、あこや真珠を包んだネックレス



黒色の真珠を組み合わせたフリンジ付きのペンダントは、ドレスシーな装いにぴったり

レースの形崩れを防ぎ、金属アレルギーを起さない素材としてたどり着いた金箔。1万分の1ミリといわれる薄さが、レースの緻密な模様をきれいに出すためにも最適な素材でした。そして、レース用を選んだのが絹糸。「一般的にはコットンですが、金箔の繊細な輝きを生かすには、より細い絹糸が適していると考えました」

繊細な持ち味を生かし合える絹のレースと金箔ですが、貼り合わせるのは容易ではありません

そこで、自分の手で箔を貼ることを決意し、石川県工業試験場へ相談。金箔を貼るための技法や材料、貼った後の耐久性などを電子顕微鏡も利用して調べてもらい、独自の技法を探っていきました。「ギラギラと華美すぎる光り方にはしたくなくなつたし、黒っぽく色が沈むのも気になったので、細かく確認しながら進めました」

接着するための溶剤や糸の種類などを研究し、思い通りの色で貼れるようになったのは約1年後。糸には、小松市内で製造している絹糸が適していることが分かり、商品化が実現したのです。その後、技法については専門家の勧めもあって特許を申請、2019年に登録されました。

細い線で描かれたような軽やかなプラチナ箔のネックレス。透け感の大小で雰囲気を変えられるのがレースの魅力



欧州で受け継がれる タティングレースの技を駆使

レースに箔貼り 独自技法を開発

「編み物を始めたのは幼稚園の頃。16歳年上の姉が編み物の先生だったんです」と笑う木和田さん。さまざまな編み物に親しんできましたが、タティングレースを手掛けている人は少なく、最初は本やウェブサイトで独学。その後、石川県外の指導者に学び、腕を磨きます。

タティングレースは、シャトルと呼ばれる舟型の道具に糸を巻き、指で糸を繰り出し結び目をつなげて模様を描き出します。リングやチェーン、ピコットなどの結び方を組み合わせると編んでいきます。糸は気温や湿度によって状態が微妙に変化します。湿気が多いと糸の滑りが悪くなり、切れることもあるので、手で加減しながら仕上げて

いきます。タティングレースの繊細で洗練された技術がアクセサリー作りへ結び付いたと話す木和田さんですが、ヨーロッパの家庭で受け継がれてきた手仕事の歴史にも引かれたそうです。「店を訪ねてこられたイギリス人のお客さまから『おばあちゃんがタティングレースを編んでいました』と聞いたときはうれしかったですね」



絹糸を巻いたシャトルで結び目を作りながら、模様を生み出していく



金箔の厚みは1万分の1ミリといわれる。1枚1枚和紙の間に挟まれており、しわにならないよう竹箸で取り出す



金箔を貼りやすく編み上げたレースに独自の接着方法で金箔をのせていく



金箔を密着させた後は、表面に傷が付かないよう柔らかいブラシで余分な金箔を落としていく



同じアイテムを多数作る場合は、大きさが均一になるようにレース編みの段階で注意を払う



繊細で上品なナプキンリングは、「特別な日のテーブルがより華やかになる」とパリで好評



里山保全のために伐採した木の枝に金箔を貼り、ボトルに入れたソーラーランプ。太陽光で充電する蓄電池が蓋に装着され、木の枝に貼った金箔が優しい光を放つ

ニューヨークやパリで人気

2019年には、ニューヨーク「アート&デザイン美術館 (Museum of Arts and Design)」での販売を開始し、現在、アメリカ国内3カ所の美術館で展示・販売されています。パリのギャラリーで開いたワークショップは好評で、日本の伝統文化に対する人々の関心の高さがうかがえたそうです。

金箔には、手仕事による伝統

技法で製造する「縁付金箔」と機械製造による「断切金箔」があり、「縁付金箔」は、ユネスコ無形文化遺産に登録されています。

縁付金箔の職人と話す機会があった木和田さんは「職人さんたちが目指すのは、ふわっとしながら、ピタッと張り付くしなやかな金箔。箔を打つ感覚は体に染みついたものだけど、環境は日々変化するから、毎日が革新というお話でした。実は私がレースに金箔を貼るときの感覚も同じ。伝統は革新の積み重ねだと改めて気づきました」と語り、自身が生み出した新しい手仕事がいっつか伝統になっていくことを強く願っています。

A



パリでは展示・販売も実施。ヨーロッパと日本の伝統の融合に感動する来場者が続出した



パリのギャラリーで開いたワークショップでは、参加者が木和田さん(左)の手の動きに見入った

最初のデザインは「剣梅鉢」がヒント



4弁の小花をつなぎ、二重にしたクロスパングトは、手仕事の技と格調の高さが光る



シンプルかつ存在感があると人気の「太陽と月」シリーズ。チョーカー、ピアスの他、ネックレスやブローチ

タテイングレースがヨーロッパの伝統技法であるのと同様、金箔は、加賀百万石の文化が息づく金沢を代表する伝統工芸品として400年以上の歴史を持つています。

木和田さんが何度も足を運ん

だ石川県工業試験場で出会った一つに「加賀小紋」がありました。「歴史的な図案の中にあつた加賀小紋は、加賀藩の剣梅鉢の紋にヒントを得たんです。そこで、最初のデザインは5弁の花で統一することにし、ロゴも

5弁の花をモチーフにしました」

その後も「伝統工芸を気軽に楽しんでほしい」と発想を広げ、新たなデザインや種類を生み出します。

最近では、社会的な課題である

SDGs(持続可能な開発目標)にも目を向け、金箔の端材を使用したブローチを考案しました。「葉っぱがたくさん並んだ大きいブローチですが、軽いので、薄い生地洋服にも付けていただけます」と木和田さん。今年8月には新規性や技術の独自性が優れているとして、石川県から「グッド石川ブランド製品」に認定されました。

枝先で揺れる葉っぱをモチーフにしたブローチ「葉っぱのダンス」(モデル着用)は、製作過程で生じる金箔の端材を活用。SDGsにつながる商品として、石川県の「いしかわ中小企業チャレンジ支援ファンド」の採択を経て誕生した。2022年度「グッド石川ブランド製品」に認定

